

文化的文脈からみた乳幼児期からの養育環境についての考察

教育心理学コース 大森 賀乃

A review of the rearing environment affecting infants from the “cultural context” point of view

Yoshino OMORI

A great deal of studies on cognitive development of human being have been explored for decades, and the environment during infancy are gradually recognized as one of the most important terms to accelerate / decelerate human's development. The present paper aimed to summarize the determiner of cognition / emotion arose from infants from the “cultural context” point of view, following Bronfenbrenner's Ecological System Theory.

目次

はじめに

- 1 章 人の発達における個人要因－性差 / 生活年齢－
 - 2 章 Macrosystem / Exosystem / Chronosystemからみた養育環境の文化差
 - A. ルーマニアの孤児研究からみる子どもの発達を阻害する養育環境
 - B. アメリカと比較した、日本の教育・しつけ観
 - C. 社会経済的ステータス (SES) からみた養育の傾向
 - 3 章 Microsystem / Mesosystemからみた養育環境の文化差
 - A. 愛着理論 (Attachment Theory & Internal Working Model)
 - B. 養育方針 (Parenting Style)
 - 4 章 今後の研究課題と展望
- 結び

はじめに

人は社会の中で生活しており、社会の中に投影した自分自身に自己の価値を見出し評価して暮らしている (e.g., Cooley, 1902; Leidner et al., 2012)。それは時に意識的であるが、殆どにおいて無意識のうちに内行的に行われる処理であり、知らず知らずのうちに表情や行動に表出している。自己についての評価がポジティブなものであれば社会生活に適応して生活をしていくことが可能であるが、自己についての価値がネガティブに自己評価された場合には、強いストレスや困難感を抱えて生活することになり、時に身体的あるいは精神的

疾患を併発するに至る。このため、これら自己の評価と感情を生み出すものが何であるのかについて、科学的な立証を得ることは重要である。過去からの知見を参照すると、「ある出来事が起きた時に人に生起する感情は、生物学的にはどの文化に属していようと古代から同じである」という考え方がある一方で、「文化的イデオロギーあるいは生育歴などの環境要因により認知の経緯が異なり、生起する感情にも差異が生じる」という主張もある。さまざまな知見を概観すると、両方の条件を兼ね備えて人は、自らの認知と感情を構築しているものと思われる。そして多くの場合において、人は自分自身でこういった内外部からの刺激をコントロールすることは難しく、日常的な刺激に対する自分の認知や感情を、意識的に調整して日々暮らしている人は少ないであろう。

また「木を見て森を見ず」という言葉があるが、人は、自分の見ている木 (自己の特性) が基準であり当然の姿であると考えていると、その他の基準を備えた、多様性に溢れる木々があることに気づくことは難しい。またそれでは、自分自身が基準とするものの“特性”を理解することも困難であろう。

このように、本人であっても自己の構成要素の認識は、難しいのである。私たちは、人の生活を“環境の異なる場所で暮らす民族性”という観点からみることによって初めて、生起する情動の質と文脈が生活環境により異なる可能性があるということについて理解できるであろう。しかしそれでも私たちは、どのような文化環境が、どのような経緯によって、特定の情動を生み出すのかについて、具体的な実験や研究知見を重ねること無しには知る由がない。このため筆者

は、人の発達に影響を及ぼす養育環境について、文化差に焦点をあてて考察することから始めたい。また、多くの層に分散している環境要因を分かり易く整理して論述するために、生態学理論として主軸となってきたBronfenbrennerのEcological System Theoryを引用してまとめることにする。Bronfenbrennerは「人の発達は5つの異なる層の環境システムから影響を受ける」とし、個人に一番近い層から順に、Microsystem, Mesosystem, Exosystem, Macrosystemと名付けた。そしてそれら環境要因から成る生活の、時間的変遷をChronosystemと呼び、5つ目の発達環境要因としている (Figure 1)。

筆者は先ず第1章にて、Ecological System Theoryの中

核となる“自己”について、個人に生得的に備わる発達の傾向性に焦点をあて、幾つかの査証について触れる。次に第2章にて、個人の発達に影響している文化・社会的環境要因 (Macrosystem, Exosystem, Chronosystem) について述べる。そして第3章では、Ecological Systemの中では最もミクロなカテゴリーであり、子どもの発達において最も影響力の強い育児環境としての“親子関係”に着目する。ここではBowlbyのAttachment TheoryおよびBaumrindのParenting Typologyに関わるいくつかの知見を引用することで、認知と情動発達に影響し得る環境要因について記したい。最後に、今後求められるであろう研究課題と展望についてを考察する。

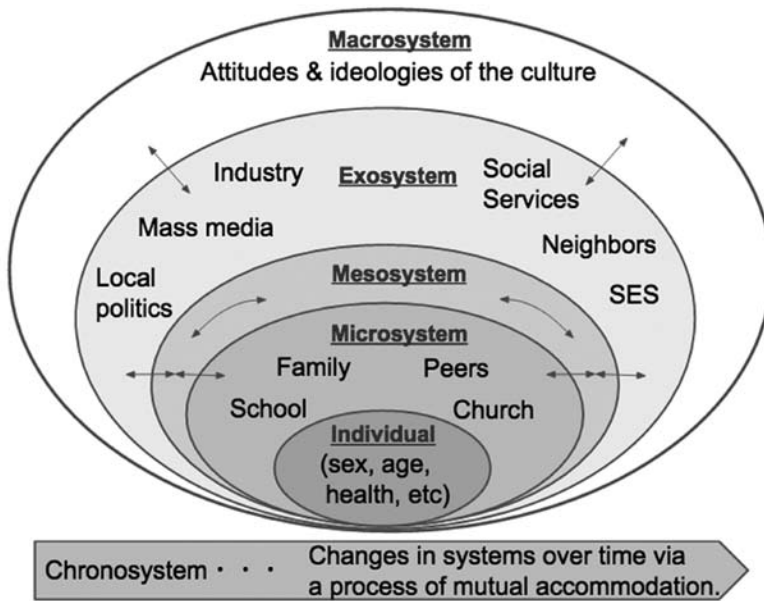


Figure 1 Bronfenbrennerの Ecological System

1章 人の発達における個人要因－性差 / 生活年齢－

先ずEcological Systemの中軸となる、個人の特性について考えてみると、私たち一人一人は今現在、生得的に規定されたプログラムの元に成長を重ねている。例として、発達における個人要因を示した研究結果には、性別による認知の違いを明らかにしたものがある。Cohen (2003) は、男性脳が理論的 (Systemizing) に思考しているのに対して、女性脳がより共感的 (Empathizing) に思考しているという研究結果を示し

た。その後若林ら (2007) は、Cohenらとの追加共同研究により、この男女差が日本人にも当てはまり、国民性に拘わらない人間特有の傾向であることを示唆している。

また生活年齢によっても、個人に規定された発達の特徴性を見ることができる。数々の知見から子どもは、幼いほどに原理原則的 (normative) に思考する傾向があり、大人は経験測的 (heuristic) に思考する傾向があることが示唆されている (e. g., Furlan et al., 2013)。ゆえに幼少期の子どもは「良いか悪いか」に

ついて、より単純明快な判断を下す傾向にあり、社会改善の案を尋ねれば勧善懲悪の方法論を答えるであろう。また乳幼児期の脳では、ある特定の時期（臨界期）に特定の外部刺激を受けることで発動する発達因子があり、これは親鴨についていくヒナ鴨の習性（インプリンティング）などが有名な例である。この特定の発達を起動させるべくスイッチが準備されている時期に、得るべき刺激が得られなかった場合には、以降その機能が発達する機会を得ることは難しいといわれている。逆に発達にマイナスの負荷を与える規定要因もある。例として、乳幼児期で受ける暴力的行為は人の心身の発達を遅らせ（e. g., Raineki, 2012）、幼児期から児童期にかけて継続的に受けた暴力的刺激、或いは児童期から受け始めた暴力的刺激に対しては、子どもが成長した時に、受けた行為と同じ行為を自分よりも弱者に再現するという、暴力の連鎖が起こりうる（e. g., Belsky, 1993; Cicchetti & Valentino, 2006; Terence & Kimberly, 2013）。これらの知見が示すように、人の発達には生得的に備わる素質がある他、ある特定の時期に、特定の刺激を受けることで生起する素因を持っているとされている。

2章 Macrosystem / Exosystem / Chronosystemからみた養育環境の文化差

次に、個人の生物学的発達に関わる環境要因について、より広い概念であるMacrosystem, Exosystem, そしてChronosystemの観点から考察する。Macrosystemには、文化が規定する人々の行動やイデオロギーが含まれる。子どもに関する概念や親子関係のあり方は国により様々であり、国力や政治の方針が子ども福祉にも大きく影響する。以下に、国により異なる子どもを巡る環境と、子どもの発達についての知見について例示する。

A. ルーマニアの孤児研究からみる子どもの発達を阻害する養育環境

子どもの発達に国政が甚大な影響を及ぼすことを示す研究として、チャウシェスク政権時以降、2001年から開始されたルーマニア孤児136名を対象とした縦断研究が挙げられる（Nelson et al., 2014）。1990年までのチャウシェスク政権下においては、エイズと貧困による困窮を極めた国情の中で、子どもは国を繁栄させるための労働力であると見なされていた。このため政府は、女性にできる限りの子どもを産ませることは施設

に収容していた。孤児院に収容された孤児の一部は、家庭で育てられた子どもたちと、米国に養子に出された子どもたちとの比較により、その発達進度が長年にわたって調査・分析された。当時の孤児院の特徴として、ケアを施す施設職員とのコミュニケーションが極めて少なかったこと、食事や入浴は流れ作業的に時間で決められ、会話もなく単調になされていたこと、乳児は無機質に並べられたベビー籠に長時間放置され、幼児・児童は服を着用せずに集団で一箇所に集められていたことなどが挙げられる。また年少の子どもは、強度のストレスを抱えた職員や年長の子どもたちから暴力を受けていたこと、全ての子どもが管理されていない暇な時間を、もて余していたことなどが報告されている。そのような環境で育成された結果、施設収容児に思考力や言語力、身長・体重といった認知および身体的な遅れが生じただけでなく、社会適応力や自己効力感の欠如など、社会・精神面にも支障が出るのが明らかとなった。また2013年4月にunicefにより提出された報告書“Child well-being in rich countries”の中でルーマニアは、現在でも他国の中で学力・生活の質・子どもの人生への満足度・子どもの死亡率など、多くの項目において最下位であった。このことは、幼少時代の劣悪な生活影響が成長後の成人期にも影響し、さらにその子どもたちの世代にも連鎖し得ることを示唆している。

B. アメリカと比較した、日本の教育・しつけ観

ここで自国である日本に目を向けると、子どもの育成に対する異なるイデオロギーが存在することに私たちは気付くであろう。先ず日本は経済国であり児童福祉については子どもの人権を中心に構成されている。子どもは親に育成されることが通例であり、特に都市部においてその多くは核家族による養育である。こういった社会環境は他の先進国と類似しているが、親子関係には日本人特有の特徴がある。東（1994）は、アメリカのしつけ教育が「教え込み型」であるのに対して日本のしつけ教育は、意図的には教えず自然に学習させる「沁み込み型」であると表現している。また風間ら（2013）は、日米合同の調査により、日本人の母親がアメリカ人の母親と比較して直接的に子どもを褒めたり励ましたりする行為を控え、代わりに母親は他者との調和や協調性を意図して「子どもの良い行動に気づかないふり」をしたり「子どもの行動に対して子どもが予期していない他の視点からものを言う」などの「あいまいな養育態度」を取る傾向があること

を示唆した。これらの研究結果は日本人が他者に寄り添って思考し、時には他者の立場や価値観を優先して調和を図る国民性であることを示唆している。これに関連して東は「東洋人の抱くイデオロギーには、“原理原則の重視型”と、道徳的判断に「人」や「気持ち」を加味する、“感性的評価の重視型”があり、前者はアメリカ的、後者は日本的であると説明している。恒吉(1992)はさらに日本人の教育について、大人は子どもに性善説に基づいた、本来あるはずの良心に訴えかける指導をする、とした。またアメリカの学校と比較して、運動会・学芸会などの集団行動から集団意識を学ばせる、課外活動に力点を置いてきていと述べている。このように日本人の教育法には、いわゆる以心伝心のような、直接的ではない伝達方法が用いられ、日本人のアイデンティティは家族やその他の集団との強固な同一化によって特徴づけられており、互恵性を基盤としている。

またM. Lewis (2005) は、日本人の私的な自己の秘密性がきわめて堅いことについて言及し、ローランド(1988)はこれを「日本人の自己はまるでタマネギのようで、きわめて多くの層を持ちながら、われわれ西欧人がイメージするような中核をもたない」と比喻で例えている。加えてLewisは日本人の親子関係について「家族の中の子どもおよび集団の中の若い成員が、絶対的な忠誠、応諾、依存性を示すことを期待されるのみならず、彼らもまた、他者からの養育や保護を期待し得る」と論じている。土居(1973)はこうした相互的な依存性のことを「甘え」と呼び、日本人固有の感情形態であるとしている。この特性は、児童期・青年期になってからの親子関係においても、「親子共同体」として継続されていると考えられる。これはアメリカと比較するとわかりやすい。アメリカの子どもは乳幼児期のしつけが直接的に厳しくなされる反面、児童期・青年期においては、個人主義のイデオロギーを反映して子どもの独自性を尊重した養育がなされている。一方で日本の養育では、乳幼児期に甘えが許される一方で、児童期に上がる頃から、教育面・進路面での親のプレッシャーや期待が強くなる傾向にある。このような子どもの生活年齢による、親子関係の心理的距離感の文化差は、日米の年齢別児童虐待数のデータとも無関係ではないかもしれない。2015年発表の児童虐待通告数によると、アメリカでは6歳未満の乳幼児が47%を占めたが、日本では23%であった。代わりに日本では6歳以上の虐待通告数が77%を占めており、そのうち58%は10歳以上の児童であった。

これまで挙げてきた文献はほんの一部であるが、子どもに対する信念や育児方針が文化により異なり、人の長期的な発達に影響し得ることを示唆する知見は、これまでに多く出されている。

C. 社会経済的ステータス (SES) からみた養育の傾向

Ecological SystemのExosystemの中では、親の社会経済的ステータス (SES) の影響性についても、言及する意義があるだろう。近年ではSES自体そのものよりも、「経済格差」という社会構造に組み込まれたSESが、人の発達や心理作用、延いては親子関係に強い影響を与えるという知見が出されている。Wilkinson(2009)は、世界の国々の統計分析から、経済格差と「平均余命」「児童の算数や読み書き能力」「幼児死亡率」「殺人発生率」「囚人の割合」「13~19歳の出産率」「信用率」「肥満率」薬物中毒やアルコール依存症を含む「精神病率」そして「社会的流動性」とに有意な相関性を明らかにした。経済力の弱さそのものではなく、“経済格差”が平均余命や学力平均、信用率を低め、疾病率や死亡率、犯罪率を高めているという結果である。またReardon(2011)による先行研究では、2001年に生まれた子どもの、親の収入の高低により比較した学力差が、その年よりも25年前に生まれた子どもの学力差と比較して、約30%~40%大きくなっていることが示されている。ここで特筆しておくべきことは、経済格差による学力不振は、移民の多い国などでは識字さえも困難なレベルであることが少なくないということである。言葉の理解不足は、学習面において、特に学童期後半に入る頃の論理的思考力に多大な影響を及ぼす。石井(2006)は、在留外国人の子どもに多く見られる問題として、日常会話に支障がなく、言葉の理解が表面的には問題なく見えても、学習時の理解には強い困難感を抱く子どもが少なくないことに警鐘を鳴らしている。そして言葉のメタ認知の不可は、幼少期から子どもが母語(最も得意な言葉)で思考できていたかどうかが大きく左右するとし、親自身も一番得意とする言葉で、子どもにとって意味のある会話をする必要性を述べている。尤もこの重要性は、在留外国人に限ったことではない。子どもにとって、家庭や社会での言葉によるコミュニケーションの不足は、論理的思考力の発達を阻み、また読み書きスキルの欠如は、複雑な事象に関する抽象的・合理的な思考を阻むであろう。これを逆説的に裏づけるように、これまで多くの知見が、幼児期からの親の本の読み聞かせや語りかけ、子

どもの気持ちの代弁、適度な子どもへの応答が、子どもの情緒及び知的発達のために重要であることを明らかにしている (e. g., Fonagy et al., 2007; 蒲谷, 2013)。

3章 Microsystem / Mesosystemからみた養育環境の文化差

さらに子どもの成長に関わる身近な環境要因として、仲間・家族・学校等 (Microsystem) と、それらの相互関係 (Mesosystem) の影響が挙げられる。ここで筆者は主に親子関係に着目して、Bowlbyの Attachment Theory および Internal Working Model と、Baumrindの Parenting Typology を引用し、成人期にも影響する、乳幼児期の発達要因とその文化差について考察する。

A. 愛着理論 (Attachment Theory & Internal Working Model)

子どもが生きるための主要な養育者であり、最も子どもとの物理的距離感が近く、長い時間を共有するのは「親」である。通常親は、子どもが社会に適応して自立できるように生活習慣や適切な振る舞い、学習態度などについて躡け、その過程の中で子どもの認知や感情が形作られていく。そして Bowlby (1969) は、乳幼児にも生得的に、母親をはじめとする養育者に対して“関わりを持とうとする性質”が備えられているという「愛着理論」を確立した。このような母親と乳幼児との相互的なコミュニケーションが良好に構築された時に、子どもは母親を「安全基地」として活動範囲を広げ、その先の長い人生において機能する「基本的信頼感」を獲得する。また同時に Bowlby は、乳幼児期の子どもの養育者との関係性が、その後の認知パターンである、内的作業モデル (Internal Working Model) にも影響することを示している。Ainsworth (1978) は、この Bowlby の愛着理論を発展させ、子どもから親への愛着表現 (Attachment Style) を3つのタイプ 1) Avoidant (回避型) 2) Secure (安定型) 3) Ambivalent (不安 / アンビバレント型) に分類した。現代ではこの3つに Disorganized (無秩序型) を加えた4タイプが主軸とされている。また Hazan & Shaver (1987) は、子どもの Attachment Style が、親密な関係性にある大人の恋愛関係においても、類似した3タイプ、1) Avoidant 2) Secure 3) Anxious-Ambivalent に分類できると定義した。ここで、子ども時代の Attachment Style が、成人期の Attachment Style (Adult

Attachment; 以下 AA) と一貫して継続しているという主張は必ずしも強くない。しかしながら、乳幼児期における、養育者との相互作用により構築された、自己と他者に対する認知と感情処理の傾向性が、内的作業モデルとして定着されることは、Bowlby 以降、多く論証されている。また、親の AA と子どもへの感情表出との関連性について Bowlby は、Ambivalent のような not secure な AA では、制御不能な怒りが生じやすいと言及し、Fonagy (2007) は、Secure な AA を持つ親は内省性 (reflective function) に優れ、共感性が高いという査証を得ている。また Attachment について「祖父母から親」「親から子」のような世代間連鎖の傾向性について触れると、Main ら (2000) は、親が自身の親との間に被虐待などの未解決なトラウマを抱えている場合、その親に育てられる幼児の Attachment タイプは無秩序型である傾向にあり、破壊 / 攻撃傾向または解離状態に陥る可能性を述べている。これは祖父母から父母に、そして父母からその子どもへと養育パターンが引き継がれる可能性と同時に、Attachment タイプに象徴される認知行動パターンも連鎖する可能性を示唆している (Fraleigh, 2002)。

この章の最後に、Microsystem の Attachment が、Macrosystem の社会環境と相互に関連していることを示唆する、Yvette (2004) によるアングロサクソン系アメリカ人・ヒスパニック系アメリカ人・アフリカ系アメリカ人を対象とした研究を引用したい。これは娘が父に対して、どのような条件で Attachment を感じるかについての調査であった。その結果、アングロサクソン系アメリカ人では、父母が離婚していない時に、父娘の Attachment は有意に強かった。また娘との質・量ともに充実した時間の共有が重要であった。その他、「娘の人生満足度」や「幼少期の父の SES」が父娘の良好な Attachment を予測した。またヒスパニック系アメリカ人の父娘の Attachment は、「現在の父の SES」や「サポートの強さ」により深まることが予測された。本来、母国で暮らすヒスパニック系エスニシティの中で典型的な父親像は、家庭内で信頼され、温かさをもって子どもを育てる「家庭的な父」である。最後にアフリカ系アメリカ人では、「父の学歴の高さ」や「家族内での有能な存在感・重鎮感」が父娘の Attachment の深さを予測していた。これらの結果を見ると、それぞれのエスニシティがアメリカでの社会的立場から希求するものが浮かび上がる。アングロサクソン系の娘が父に求めるものは、その他の二つよりも抽象的な幸福感に近いものであると考えられる。ヒ

スパニック系アメリカ人の娘が求める父親像は、より現実的である。2000年にはヒスパニック系アメリカ人の人口がアフリカ系アメリカ人を超え、その労働力や団結力から社会的な立場も、アングロサクソン系アメリカ人>ヒスパニック系アメリカ人>アフリカ系アメリカ人という構図になっている。現在のヒスパニック系アメリカ人にとって、父のSESやサポート力はまさに希望の伝であろう。またアフリカ系アメリカ人では、より直接的に家族としての繋がり、父としての存在感を求めているように捉えられる。彼女たちは父との同居率が低いことが特徴的である。しかしそれが即ち、娘の人生から父が消失するということでは、必ずしもないのであろう。これらの結果が示すように、子の親に対するAttachmentには、社会で生きていくうえで“親の利用価値”的な要素も含まれ易い。そしてそれが子ども又は親自身の評価で、“足りていない”と感じられる時、親の自己効力感は弱まる。また反対に、十分に役割を果たしていると認知された時に、親の自己効力感が高まり、子どものAttachmentにも良好に作用することが、知見として出されている (e. g., Howard, 2010)。

B. 養育方針 (Parenting Style)

次に親の養育方針について、知見を引用しつつ考察する。親の養育方針は、無論それぞれの家庭により異なるが、いくつかの知見により、これら多岐にわたる養育スタイル (parenting style; 以下 parenting) がタイプ分けされている。代表的なものとしてBaumrind (1967) により、応答性 (responsiveness) と支配性 (demandingness) の二軸の強弱で構成された、権威主義的 (Authoritarian)、指導的 (Authoritative)、許容的 (Permissive) のタイプ分けがある。Baumrindによる「権威主義的」な親は、子どもの要求や自主性を抑制して、

親の基準に沿った行為のみを評価する。子には従順さを求め、懲罰的にコントロールする。「指導的な親」は、躰けによる子の服従を重視しつつも、子どもの自主性や意見も尊重し、親としての自分が唯一正しいという考えを持たない。子どもの視点や言い分を理解したうえで、理性的に子どもを指導する。「許容的」な親の特徴は、子どもの衝動性や欲求に対して懲罰的ではなく、常に受容的に応対する。子どもにとって自分は指導者ではなく友人に近く、何でも子どもの願いを叶えてあげられる存在だと思われるように振る舞う、などが挙げられる。この3つに加えて現代では、全く子どもに感知しない「拒否 / 放任的」を含めた4タイプでBaumrindのparentingが考えられている (Figure 2)。

これまで数多くの知見により、「指導的」な親が最も子どもの発達に良好な結果をもたらし、「権威主義的」「許容的」或いは「拒否 / 放任的」な親では、子どもの攻撃性・抑うつ・非行などを誘発する傾向にあることが示唆されてきた。しかし近年では、その結果が主に西欧の中流階級以上の家庭の子どもにおいて当てはまるものであり、異なる文化、特に社会的に安全性の低い環境下や、集団での調和を重要視する文化においては、権威主義的なparentingがそれほどの悪影響を及ぼさないという知見も出されている。これは、例えばある社会では、親が権威主義的であるからこそ、子どもの安全や社会的調和が保たれているのだという通念が流布しており、子どもがそれを理解して暮らしているためであるとも考えられる。またGarciaら (2009) は、スペインに暮らす12歳から17歳までの学生を対象とした調査で、指導型よりも許容型の親の方が、子どもの発達に良い結果をもたらすという示唆を得ている。興味深いことに近年では、欧米に暮らす子どもたちに変化が見られていることも報告されている。Hibbardら (2014) は、アメリカCalifornia州の

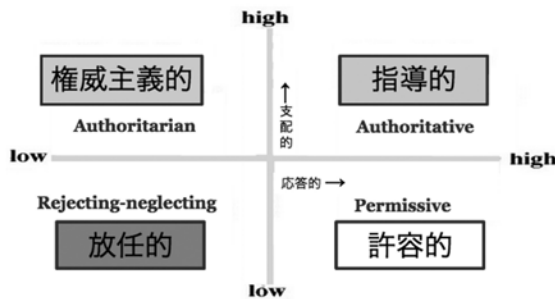


Figure 2 BaumrindのParenting Typology

小学生に対して行った学業達成のモチベーションと親のparentingとの関連性についての調査で、指導的parentingと権威主義的parentingの両方において、学業へのモチベーションが良好であったと報告した。このような年代による変化が起こるのは、なんらかの社会環境的な要因（例として、学業は自分にとって重要であり、親の厳しい管理が必要だと、子ども自身が思考する社会となった等）が影響しているものとも考えられるであろう。

その他、10代の子どもからみた、親のparentingについての「評価」では、ヒスパニック系アメリカ人の子どもは、親が「許容的」「指導的」なparentingをすると評価した（Strom et al., 2008）。一方でアフリカ系アメリカ人の子どもは、親が子どもに関わる情報収集力に欠け、子どもとの共有時間が少ないと評価した。さらに、子どもの自由意志や選択権を認めないとの評価も加わり、総じて「権威主義型」と「放任型」だと評価する傾向がみられた。

また、SESとparentingとの関連性を示す知見の中には、ヒスパニック系アメリカ人では、SESが高いほどに「権威主義型」なparentingになる一方で、アングロサクソン系では、SESが高いほどに「指導的」なparentingになる傾向性を示唆したものがある（Cardona et al., 2000）。そして中国人を対象としたparentingの調査では、養育者は自分の価値を子に投影する傾向にあり、白人と比較して支配的であることが報告されている（e. g., Tseng, 2013）。インドでは子どもが労働力として重宝される文化にあり、収入源として優れた男子で、年齢が上がるほどに親のコントロール欲求が高まることを示唆した文献がある（Mathur, 2009）。

それでは、こういったparentingを規定するものは何であるのか。Belsky (1984) は、Parentingの規定因を、1) 親の要因 2) 子の要因 3) 環境要因の3つとし、“Parenting Process Model”と称した。それらの相互作用により、多様な養育方針が出来上がっている。どのような生活環境と信念を備えた親が、どのような子どもの特徴に反応し、どのような育児をするのかは、実に千差万別であり、家族の数ほどに多様性があるであろう。しかし地道にも確実に立証された研究を蓄積し、それらを総合的に分析することにより、各民族性が抱き易い感情生起の機序、延いてはparentingについて、私たちは興味深い傾向性を得られるであろう。Belskyが定めたparentingの規定のなかで「子どもの要因」を例に挙げると、“愛され易い”子どものタイプには、民族性による差異がある可能性がある。こ

の観点について綿密に調査した研究がある。Harwood (1995) は、母親が子どもに期待する振る舞いについて、Ainsworth (1978) のStrange Situationから引用した、母子の様子を描写した絵コンテから選択させる方法で分析している。絵コンテには、回避型からアンビバレント型までの6タイプの子どもの様子が示されており、母親に各子どもの振る舞いに対する理想度・典型度、そして自分の子どもとの類似度を評価させた。この調査分析は、アメリカ人とプエルト・リコ人の母とを対象としたものであったが、結果は、アメリカ人の母がより独立的（回避型）に振るまう子ども好む一方で、プエルト・リコ人の母では、時には親の存在を意識して甘え、より依存的な振る舞いを示す子どもを好む、という結果が得られた。また同研究にて、アメリカ人の母が望む子どもの将来像として「社会的自己実現」に重点を置く傾向が見られるのに対し、プエルト・リコ人の母は「協調性」「社会的望ましさ」「親への敬意」を期待する傾向が示された。この研究では、エスニシティにより理想の子ども像と大人像が違い、その好みも、それぞれの文化的イデオロギー（個人主義と集団調和主義）に一致していることを示している。

これまで示してきた文献の数々は、総じてAttachmentとParentingとが親と子の相互関係により生み出され、それは社会的文脈の影響を受けていることを、十分に示唆している。

4章 今後の研究課題と展望

東が述べた2つの認知タイプ「原理原則の認知型」と「感情重視の認知型」に当てはめて考えてみると、職業や収入・社会的立場など、シンボルとしての自己に気持ちが着目しやすいのは「原理原則の（状態的）認知型」であり、人間関係における感情起伏に着目しやすいのは「感情重視の認知型」であると推測できる。前者がアメリカ人的であり、後者が日本的であることは、多くの知見により論述されてきている。またAttachmentとParentingの傾向性に沿って考えると、個人主義である欧米人あるいは中国人などは「独立回避型」を志向し、日本人あるいはヒスパニック系は集団性を重視する「甘え依存型」の志向性が強いと考えられる。これら2つの傾向性を全て併せると、

- 1) アメリカ人・中国人＝状態認知的＝独立回避型
 - 2) 日本人・ヒスパニック＝感情認知的＝甘え依存型
- という傾向が示唆される。これらエスニシティにより異なる認知と感情面の傾向性の理解は、互いの強みや

脆弱性を明らかにし、民族による相違や摩擦が生じた際にも、より合理的な解決の糸口を見出すことが期待できる。

今後の課題として、この傾向性について更に多くの検証を蓄積し、“安定した認知・感情”のバランスと、“抑圧や爆発に至る認知・感情”の限界閾値がどのくらいの値であるのかについて、科学的立証を試みる意義は大きいと考えられる。また、幼少期での養育環境によりある程度規定された発達の状態が、その後の経験の蓄積により、どの程度影響を受けるかについても、更なる実証研究が求められる。Ecological System Theoryという環境要因と人間発達との関係性をみていく科学分野において、単なる枠組みで終わるのではなく、生態学的な発達のしくみが実証的かつ数値的論拠をもって明らかにされていくことが、種としての人間理解を深める上で今後は不可欠であろう。

結び

多くの文献により、人が無意識にも文化に適応し、自己の認知と感情が形成されていることについて私たちは知ることができる。またCooleyやLeidnerらが示した、人が社会を鏡にして自己評価を行う機序について立ち返ってみると、私たちは「自己が思う理想と現実」のバランスを評価しているのであり、人が理想的だと望む状態は、即ちストレスの要因にもなり得る。そしてその評価の柔軟性は、どのように養育・教育されてきたのかという養育環境が、大きく作用することがわかる。

世界全体がグローバル化する一方で、他者との関係性が脆弱化している現代社会において、私たちはそれぞれに感じ方や基準が違うという事実について理解し、より意識的に、共生する社会に不足するものを補強し合う試みが重要であると考えられる。

引用文献

- 東洋 (1994). 日本人のしつけと教育—発達の日米比較にもとづいて— 東京大学出版会
- Baron-Cohen, S., Richler, J., Bisarya, D., Guranathan, N., & Wheelwright, S. (2003). The systemizing quotient: an investigation of adults with Asperger syndrome or high-functioning autism, and normal sex differences. *The Royal Society*, **358**, 361-374.
- Baumrind, D. (1967). Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genet Psychol Monogr*, **75**, 43-88.
- Belsky, J. (1984). The Determinants of Parenting: A process model. *Child Development*, **55**, 83-96.
- Belsky, J. (1993). Etiology of Child Maltreatment: A Developmental-Ecological Analysis. *Psychological Bulletin*, **114**, 413-434.
- Bronfenbrenner, Urie. (1986). Ecology of the family as a context for human development: Research perspectives. *Developmental Psychology*, **22**, 723-742.
- Cardona, P., Nicholson, B., & Fox, R. (2000). Parenting among Hispanic and Anglo-American mothers with young children. *The Journal of Social Psychology*, **140**, 357-365.
- Cicchetti, D., & Valentino, K. (2006). An Ecological Transactional perspective on child maltreatment: Failure of the average expectable environment and its influence upon child development. *Developmental Psychopathology (2nd ed.)*, 129-201.
- Cooley, C. (1902). The Looking-Glass Self. *Human Nature and the Social Order*, 179-185.
- Doi, T. (1973). *The anatomy of dependence: The key analysis of Japanese behavior*. New York: Kodansha International.
- Fonagy, P., Gergely, G., & Target, M. (2007). The parent-infant dyad and the construction of the subjective self. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **48**, 288-328.
- Fraley, C. (2002). Attachment Stability From Infancy to Adulthood: Meta-Analysis and Dynamic Modeling of Developmental Mechanisms. *Personality and Social Psychology Review*, **6**, 123-151.
- Furian, S., Agnoli, F., & Reyna, V. (2013). Children's competence or adults' incompetence different developmental trajectories in different tasks. *Developmental psychology*, **49**, 1466-1480.
- Garcia, F. & Gracia, E. (2009). Is always authoritative the optimum parenting style? Evidence from Spanish families. *Adolescence*, **44**, 101-131.
- Greenberg, M., Cicchetti E., & Cummings, M. (1990). Attachment in the Preschool Years: Theory, Research, and Intervention. *University of Chicago Press*, xix, 507.
- Harwood, R., Miller, J., & Irizarry, N. (1995). Culture and Attachment: Perceptions of the Child in Context (Culture and Human Development). *The Guilford Press*, xvi, 169.
- Hesse, E., & Main, M. (2000). Disorganized infant, child, and adult attachment: collapse in behavioral and attentional strategies. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **48**, 1097-1127.
- Howard, K. (2010). Paternal attachment, parenting beliefs and children's attachment. *Early Child Development and Care*, **180**, 157-171.
- 石井恵理子 (2006). 年少者日本語教育の構築に向けて—子どもの成長を支える言語教育として— (特集 年少者日本語教育の現在—その課題と展望—) *日本語教育*, **128**, 3-12.
- 風間みどり・平林秀美・唐澤真弓・Tardif, T.・Olson, S. (2013). 日本の母親のあいまいな養育態度と4歳の子どもの他者理解—日米比較からの検討— *発達心理学研究*, **24**, 126-138.
- 蒲谷慎介 (2013). 前言語期乳児のネガティブ情動表出に対する母親の調律的応答：母親の内的作業モデルおよび乳児の気質との関連 *発達心理学研究* **24**, 507-517.
- Leidner, B., Sheikh, H., & Gingers, J. (2012). Affective dimensions of intergroup humiliation. *PLoS One*, **7**, e46375
- Lewis, M. (1995). SHAME -The Exposed Self-. (レイス, M. 恥の心理学—傷つく自己—, 遠藤利彦・上淵寿・坂上裕子 (訳) (1997) ミネ

ルヴァ書房)

- Mathur, M., Rathore, P., & Mathur, M. (2009). Incidence, type and intensity of abuse in street children in India. *Child Abuse & Neglect*, **33**, 907-913.
- Nelson, C. A., Fox, N. A., & Zeanah, C. H. (2014). Romania's Abandoned Children -Deprivation, Brain Development, and the Struggle for Recovery- *Harvard University Press*.
- Pajer, K. A., Gardner, W., Lourie, A., Chang, C., Wang, W., & Currie, L. (2014). Physical Child Abuse potential in adolescent girls: Associations with psychopathology, maltreatment, and attitudes toward child-bearing. *Canadian journal of psychiatry*, **59**, 98-106.
- Pope, T. F. (2004). Predictors of Father-Daughter attachment for African American, Latino, and Caucasian women in the U.S. *University of La Verne*, DAI-B 65/06, 3211.
- Raineki, C., Cortés, M. R., Belnoue, L., Sullivan, R. M. (2012). Effects of early-life abuse differ across development: Infant social behavior deficits are followed by adolescent depressive-like behaviors mediated by the Amygdala, *The Journal of Neuroscience*, **32**, 7758-7765.
- Reardon, S. F. (2011). The Widening Academic Achievement Gap Between the Rich and the Poor: New Evidence and Possible Explanations. *Whither Opportunity?: Rising Inequality, Schools, and Children's Life Chances*, **5**, 91-116.
- Scheff, T. (2003). Shame in self and society. *Symbolic Interaction*, **26**, 239-262.
- Scheff, T. (2005). Looking-Glass Self: Goffman as Symbolic Interactionist. *Symbolic Interaction*, **28**, 147-166.
- Strom, R., Strom, P., & Beckert, T. (2008). Comparing Black, Hispanic, and White mothers with national standard of parenting. *Adolescence*, **43**, 525-545.
- Terence P. T., & Kimberly L. H. (2013). Intergenerational continuity in maltreatment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **41**, 555-569.
- 恒吉僚子 (1992). 人間形成の日米比較—かかれたカリキュラム 中公新書
- Wakabayashi, A., Baron-Cohen, S., Uchiyama, T., Yoshida, Y., Kuroda, M., & Wheelwright, S. (2007). Empathizing and Systemizing in Adults with and without Autism Spectrum Conditions: Cross-Cultural Stability. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **37**, 1823-1832.
- Watabe, A., & Hibbard, D. (2014). The influence of authoritarian and authoritative parenting on children's academic achievement motivation: a comparison between the United States and Japan. *North American Journal of Psychology*, **16**, 359.
- Wilkinson, R., & Pickett, K. (2009). Income inequality and social dysfunction. *Annual Review of Sociology*, **35**, 493-511.

(指導教員 遠藤利彦教授)